

こうして男爵薯は残った

◆美味しかった昔のジャガイモ

「雪片ゆきかたといういもは、ほんとうに美味しかったなあ」。昭和20年代北海道の農村地帯での古老の話です。まだ食糧難の時代で、ジャガイモも空腹を満たしてくれる貴重な主食となっていました。当時の主な栽培品種は男爵薯、農林1号、紅丸でしたが、いかに腹の足しになれば何でも、という時代とはいえ、少しでも味の良いものが好まれ、男爵薯は食用、農林1号は食用兼でん粉原料用、紅丸はでん粉原料専用と、ほぼ色別けされていて、やや土臭い感じの農林1号に比べてくせのない、口ざわりのよい男爵薯はほんとうに美味しく、昔を知らない若者はこれこそ最高のジャガイモの味と感じとったのも無理ありません。その男爵薯を前にして、明治時代から作り続けられてきた品種を知っている人たちは、雪片の味をなつかしがっています。安孫子孝次氏の農業よもやま話（1960）にも男爵薯について、「味は最上等というわけではありませんが、早生でつくりやすい品種です……」と述べられ、男爵薯よりももっと食味の良いものがあったことを示唆しています。

明治初年以來、北海道農業振興のため多くのジャガイモ品種が輸入されましたが、そのほとんどは食用で、なかに絶讃を博した「雪片」をはじめアーリーローズ、ヘブロン、アメリカ大白たいはく、蝦夷錦えぞにしき（グリーンマウンテン）など良食味の品種が含まれています。男爵薯が優良品種に指定されたのは昭和3年（1928、本号24ページ参照）で、この頃には食用とし

てアーリーローズが3割弱、ついでアメリカ大白、蝦夷錦が多く作られ、男爵薯は全体の2％にすぎませんでした。アーリーローズは一時期北海道での栽培面積のほぼ半ばを占めるほどに普及しましたが、病害に弱く、また皮の白色のものが好まれるようになってきたため、昭和年代に入り急激に減少してゆきます。雪片は優れた味が親しまれながらも病害に弱く、栽培が難しいため、昭和10年（1935）をすぎる頃には1％に満たないほどに面積を減らしてしまいました。

◆普及をみなかった男爵薯のライバル

昭和12年（1937）に勃発した日華事変以降の戦時体制下で、ジャガイモはでん粉、アルコール製造原料としての重要性が増し、これに向く品種の一層の普及がはかられましたが、戦時下の資材、労力が不足する時代には、周到な管理を施してはじめて好成績が得られるような品種は敬遠され、またウイルス病などの累積によって退化してゆき、雪片、ヘブロン、アメリカ大白などが脱落しました。男爵薯は他に比べて病害に強かったこと、北海道ばかりでなく府県、海外でも作りやすく好成績をあげられたことが、難局を切り抜けられた最大の要因であったと考えられます。

このように戦時下を生きのびるだけでなく一層の普及をみた男爵薯でしたが、国のばれいしょ育種試験地では男爵薯よりも優れた食用品種育成を目指し、戦時下、また終戦直後から交配が開始されています。日本人の多くはほくほくとしたいもを好むので、粉質であ

ること、早生で作りやすく病害抵抗性をもっていること、多収であること、などの特性を備えている強力なライバルとして昭和28年（1953）にチトセが、同29年にオオジロが育成されました。前者は男爵薯よりも熟期が2～3日早く、食味も良く、ウイルス病に比較的強いため期待されましたが、目が深くていもの形はよいとはいえず、小さいもの割合が多く、しかも男爵薯のようにどこで作ってもよく出来る、という適応性に欠け、広く普及することなく数年で姿を消しました。後者は男爵薯×農林1号（男爵薯×デオダラ）の交配で得られたものだけに、地上部は男爵薯とほとんど区別がつかないくらいよく似ていて、花色が濃い紫色であるために開花期に辛うじて識別できるくらいです。ウイルス病にはやや強く、いもの形はやや偏平で、肉質は粉質であり、一時はこの品種が現われたために男爵薯の命運も尽きるか、とまでささやかれました。しかし粉質であってもザラザラした感じがあって口ざわりは決してよいとはいえず、農林1号に似た土臭さもあり、栽培面では小さいものが多く、適応性も男爵薯ほど広くないため期待されたほどには伸びず、現在本州の一部で生産される程度ですが、このように期待を担って育成された品種も男爵薯にとって替えることはできませんでした。最近とうや、ベニアカリ、さやかなど、いくつかの食用品種が育成されていますが、これらは汎用性のもではなく特定の用途向けを狙ったものであって、男爵薯との住み分けを可能にしています。二期作用として暖地では多くの優良品種が育成され、伸びていますが、全国的にみればここしばらくは男爵薯にとって替える品種の出現は難しいのではないかと思います。

◆クリアされた内面的な問題点

戦中戦後の苛酷な時代を生きのび、ライバルの追求もかわしましたが、男爵薯それ自体がかかえる問題もなかったわけではありません。その一つは形質の乱れです。本来は球形で目が深いはずなのに、長いもの、偏平なもの、目が少し浅いものが多く現われ、「これが男爵薯か」とまでいわれるようになりました。地上部も、もともと草丈が低くて頂部が少し開きかげんになるものが、背が高く粗剛な直立型のもの、また白花を着けるもの、などが現われました。種いも生産畑で直立型、白花のものを取り除き、いもは球形のものを選んで種いもに用いることを続けた結果、次第に本来の特性に近付いてゆきましたが、札幌郊外の島松（現恵庭市下島松）にあったばれいしょ試験地で選抜した系統（ICS-62）が普及してからは、形質の乱れの問題は解決をみえています。

あと一つは微斑モザイク病の発現で、昭和20年代後半に多く発生し、生育盛期にやや低温曇天の状態が続くとほとんどの株に弱いモザイク症状が現われ、これが種いも検疫上問題となったことです。研究の結果Xウイルスによるものとわかりましたが、男爵薯はすべての株がこのウイルスに侵されていたために根本的な解決ができず、この面でも前記チトセ、オオジロの両品種が男爵薯のかわりになると期待されたわけでした。当面、畑でとくに強いモザイクを現わす株を取り除くことにより対処しましたが、昭和30年代後半に導入された組織培養の技術によってウイルス無病の男爵薯が作り出され、広く普及されてこのモザイク病問題も解決され、今日に至っています。（編集部）